

みんな悩んで教師になろう！

〈第三章〉授業の見方が変わる，教師の生きざまが変わる

制野俊弘（研究局長・和光大学）

「失敗学」に学ぶ

世の中には数々の失敗が溢れています。現在の社会の足元には、数々の失敗の屍が累々と横たわっているのです。

これに関わって、「ハインリッヒの法則」というのがあります。1 件の重大な事故の裏には、29 件のかすり傷程度の軽い事故があり、さらにその裏にはケガに至らない「ヒヤリ、ハット」の体験が 300 件隠れているということです。

「失敗学のすすめ」の著者・畑村洋太郎氏は、次のように述べています。

『こうすればうまくいく』といういわば陽の世界の知識伝達によって新たにつくりだせるものは、結局はマネでしかありません。ところが、『こうやるとまずくなる』という陰の世界の知識伝達によって、まずくなる必然性を知って企画することは、人と同じ失敗をする時間と手間を省き、前の人よりも 1 ランク上の創造の次元から企画をスタートさせることができます」

そして、畑村氏はこう付け加えます。

「小さな失敗を不用意に避けることは、将来起こりうる大きな失敗の準備をしていることだ」

失敗から学ぶ組織とそうでない組織

もう少し「失敗学」の話を続けましょう。「失敗の科学」の著者、マシュー・サイド氏は、失敗から学ぶ組織とそうでない組織の例として、航空業界と医療業界を挙げています。それによると、航空業界は、事故が起こるたびに独立した専門家チームが事故の検証が行い、その結果、フライト 240～830 万回のフライトで 1 回の事故確率だということです。

一方、医療業界は、失敗を公表し、それを客観的に検証するシステムがないため、アメリカだけで毎年 4 万 4 千人から 9 万 8 千人が回避可能な医療過誤によって死亡しています。アメリカの上院公聴会である医師はこう証言しました。

「つまり、ボーイング 747 が毎日 2 機、事故を起こしているようなものです。

あるいは、2 か月に 1 回『9. 11 事件』が起こっているのに等しい」

失敗の向き合い方によって、結果は全く違ったものになるのです。

失敗に怯える教師たち

さて、今の日本の教育界はどうでしょう。自ら失敗を語り、失敗と向きあい、失敗から教わる・学ぶ姿勢をもっているでしょうか。

この問題の立て方にも、問題がありま

す。なぜなら、今の教育界は、そもそも失敗を許さない風土が形成しつつあるからです。だから失敗はもともと「ない」ことが前提となっているのです。

現場のマニュアル化、スタンダード化の浸透はその証左です。つまり、「この通りにやれば失敗はない」というおびさり主義と、「赤信号、みんなで渡れば…」という横並び主義・事なかれ主義が、複合的に作用しているのです。

したがって、本来、教育にとって有益なはずの創造的な失敗＝果敢な取り組みが鳴りを潜め、当たり障りのない平準化された、誰からも文句の言われない無難さに安住しようという志向が蔓延ることになります。失敗が許されない空気に怯え、いつしか失敗は隠れてしまうのです。共有財産化すべき失敗事例も、地下に潜って迷宮入りするのです。

そして、実践そのものが無色透明なものとなって、彷徨を始めるのです。

教育とは何かを問い続ける

教育とは、実験的な要素を含み込んだ創造的な概念であることを、見逃してはいけません。太田堯氏は、教育について次のように述べています。

「教育は生命の“根元的自発性”を補助する“アート”である」

教育とは、子どもの生まれもった自発性を励まし、子どもが「その気」になる瞬間を演出する芸術だということです。当然、失敗することもあるでしょう。これは創造的な失敗です。そして、この芸術

的な仕事の対極にあるのが、まさしくマニュアル化、スタンダード化なのです。

今大会の全体会で紹介される荒木豊氏は、この“アート”を「地」でいった一人です。同志会の系統性研究の理論と実践を築き上げた研究者です。戦後の荒廃期から立ち上がる中で、科学性と民主性を軸に、系統性研究の必要性を訴え、その実践化に邁進した人です。

しかし、この原稿を書いている最中、11月24日、荒木先生は静かに息を引き取りました。享年87歳。冬大会の報告ができればと考えていましたが、それも叶わぬ夢となりました。今大会は荒木先生を偲びながら、その精神を引き継ぐ大会となります。講師の久保氏には、荒木氏をはじめ、当時の同志会が、なぜ系統性研究に取り組み始めたのか、内実(思想から実効性まで)はどうだったのか、数々の挑戦と失敗の中で追究された「系統性研究」の意義をどう引き継ぐかを語っていただき、新しい系統性を創出する契機、新しい教材づくりへの足掛かりにしたいというのが、研究局の願い(目的)です。「すべての子どもをできるようにさせたい」という思いが、今、なぜ必要なのかを考える全体会にしたいと思います。

そして、この「系統性研究」を出発点に、授業における問いやグループ学習、教科内容研究に光をあてたいというのが、本講座の趣旨です。

「めっちゃこだわる教材研究」

さて、各講座の趣旨に入ります。表題

の講座は、牧野・平野・岡崎の三氏にお願いしました。牧野氏には、昨年引き続き水泳を中心に、平野氏には「水俣」へのこだわりについて語っていただきます。ベテラン2人のこだわりの原点と到達点、そしてこの「一点突破」から見えてくる景色（子どもや教師の変化、社会との接点、他教材の視点の変化など）を語っていただきます。

それに対し、岡崎氏には、若手の代表として、実際にいつ、どのように教材研究を行っているのか、一つ一つの教材にこだわるための基底的条件（問題意識の土壌）は何かなどを語ってもらいます。教材研究法の現代的視点といってもいいかもしれません。

三人の共通点は、その「しつこさ」にあります。こだわらなければならない理由、こだわるべき内容について、それぞれ語っていただけると期待しています。

目の前の子どもから考え、創り出す

教材づくりを考える上で、最も示唆的なのが、障がい児体育と健康教育です。それは子どもの生活と教科内容の接点で、教材がつくられるからです。これは教材づくりの「王道」といいいいかもしれません。そこでは「所与の教材」は、一度否定されます。辻内氏には、その必然性と醍醐味を存分に語っていただきます。

また、健康教育では、昨年に引き続き、鎌田氏に、「からだを知る！ 素敵な保健の授業」として、からだの学習について紹介していただきます。鎌田氏のこだわり

は、子ども自身のからだの実感や、生活意識を実践の土台に据えているところです。骨折やからだを守るしくみなどの実践例を紹介していただきます。一緒に簡単な教具も作ります。

築田氏には、「これから性教育を学ぶ人のために」と題して、生徒一人ひとりが性の主人公（「性的主体」）になるために必要な性教育のあり方、そしてその背後にある性に関する社会の見方について語っていただきます。学生たちの性意識から遡り、小中高の性教育で何を語るべきか、その視点を提供していただきます。

全方位的实践としての教科外体育

今回は、教科外体育として、安武氏に運動会の講座をお願いしました。子どもの主体性を引き出すには、教科体育だけでは限界があります。生活体育を出発点とする、同志会の全方位的な実践構想の中で、教科外体育は極めて重要な位置を占めています。とりわけ運動会などの体育的行事は、子どもの発達の節目で、「自立」を促す重要な役割を果たします。私たちにとっては、「主戦場」の一つです。

また、部活動を担当する松宮氏には、自身の部活史と部活指導史を振り返っていただき、スポーツの論理（勝利を目指すこと）と教育の論理（子どもを育てること）の間で起こる教師の葛藤と、それを乗り越えてきた自身の指導の履歴を語っていただきます。中学教師のリアルな悩みと、それを乗り越えるヒントが聞けるのではないかと思います。

子ども理解・文化理解と体育実践

子どもをどう理解し、学びをつくるか—この視点の講座を二つ企画しました。

一つは、西田氏による「子どもをわかること、子どもとわかること」という講座です。スポーツのルールの意味を考えたボッチャの実践を中心に、体育以外の教科も含めて、子どもを「わかる」ことと、子どもとともに「学び」を成立させることとの間にある、緊張関係（結合と離反）について語っていただきます。

もう一つは、制野による「学級づくり・学校づくりと体育」です。教科体育や教科外体育が成立する背景には、その学級・学校の間関係や文化的成熟度があります。子どもの声に耳を傾ける学校・学級文化なしに、体育の授業は成立しませんし、学校行事はつくれません。今回は、その有機的な連関の環をどうつくるか、多様な価値観をもつ子どもたち・教職員とどう関わるかについて考えます。

体育の教科内容の「総合化」

体育理論は、伊藤氏が担当します。参加者の感想で毎年好評なのが、この体育理論の講座です。「体育理論」は、同志会の先駆的に取り組んだ領域です。「体育に関する知識」から「体育理論」へ領域名が変わり、実践が少しずつ浸透してき手いますが、実践の蓄積はまだ道半ばです。子どもがスポーツを文化として「知る」ことは、「豊かなスポーツライフ」という実用性を超えて、人間の生活そのものを豊かにし、運動文化を創り変える契機を

含んでいます。

若手教師たちによる初の企画

今回は、講座案を練る段階で、研究局の若手（堀江・川淵）が全国の若手会員の声を拾い上げました。そこで、要望のあった「平和教育とスポーツ」を澤氏に、そして夏の注目実践から「S君との一年」を報告した笹田氏に講師をお願いしました。講座の企画は、毎回、頭を悩ませるものですが、今回は思い切って「若手による若手のための講座」設定しました。

現場の悩みに寄り添って

さて、現場の生の声に寄り添う企画として、漆山氏による「ルーシーの『あなたのお悩み解決します』」と、岨氏による実践力パワーアップ公開授業講座を設定しました。漆山氏は滋賀支部ニュースで毎回、会員の悩みに寄り添うコメントで、好評を博しています。また、岨氏には、参加者を子どもに見立てた、「本物」の授業をしていただくようお願いしました。教材は「タグラグビー」です。

いずれの講座も、数々の創造的失敗の中で、創られた実践が語られます。参加者自身の力で、展望を開く講座になることを期待しています。

2020・広島大会に向けて

平和のバトンが、いよいよ被爆地・広島に手渡されます。「二度と同じ過ちは繰り返さない」ことを心に刻む大会にしましょう。今大会が、その起爆剤となることを期待します。